

共同研究 ● 東南アジアのポピュラーカルチャー——アイデンティティ、国家、グローバル化 (2013-2016)

## はじめに

2013年10月に始まったこの共同研究は、ポピュラーカルチャーの諸ジャンルを対象として現代東南アジアにおける文化の生産と消費について考え、人々のアイデンティティ形成のプロセスを人類学的に探求することを目的としている。研究対象として取り上げるのは音楽、映画、コミック、雑誌、ダンス、テレビ、演劇、ファッションなどを含むメディアや身体表象である。ポストコロニアル時代の国家形成のプロセスや世界的に進みつつある情報のグローバル化などにもとない、東南アジア各地でこれらのポピュラーカルチャーの生産と消費のプロセスには様々な価値観の葛藤や論争を見ることが出来る。研究会を通してメンバー全員で東南アジアにおいてポピュラーカルチャー研究が投げかける問題を考えていきたい。

研究テーマの重要な概念の1つであるアイデンティティは、民族、ジェンダー、階級、世代、地域などの多様な側面を含む。ポピュラーカルチャー研究は、アイデンティティの諸側面に関わる価値観のせめぎ合いや格差を主たるテーマとしてカルチュラル・スタディーズの研究分野で発展してきた。研究対象がいわゆるサブカルチャーやカウンターカルチャーと同義とされることも多く、主として「伝統」的とされる文化に関心を寄せてきた人類学の研究テーマであるよりは、どちらかというカルチュラル・スタディーズの専売特許であると見なされてきた。我々の目指すところは従来のカルチュラル・スタディーズの学問的関心に人類学の研究者として取り組んでみたいということである。メディア研究やオーディエンス研究などの視点も取り入れつつ、長期にわたって芸術活動や表象文化を丹念に調査し現地の人々との対話を重ねていくことを通して、アイデンティティ形成をめぐる批評や論争を分析し価値観の葛藤やせめぎ合いのプロセスに分け入っていきたいと考えている。

今回の論考ではアイデンティティの中で私自身が関心を持

つジェンダーについて、特に「女らしさ」や「男らしさ」の表現をめぐる議論に関してインドネシアのコミックと映画を事例に考えてみたい。

## コミックに描かれる「伝統的」女性像とその変革

第1の事例は、1960年代から80年代にインドネシアで広く親しまれたR. A. コサシ Kosasih (1919-2012) によるワヤン・コミックと呼ばれる漫画である。インドネシアでは影絵や人形劇などに代表される伝統演劇ワヤンが知られているが、コサシのコミックはこのワヤンの主要な物語である古代インドの叙事詩ラーマヤナとマハーバーラタをもとにしている。このコミックには様々な興味深い特徴が見られるが、ここでは特に「女らしさ」の描き方という問題を考えてみたい。古代インドの叙事詩に基づく伝統芸能の中で理想的とされる女性像は美しく優雅で男性に対し従順で貞淑な女性である。これは理想の男性像が見目麗しく戦いに強く知的で武將にふさわしい人徳の高い人物とされることと表裏一体の関係にある。舞踊劇などの中でもしぐさや衣装、身体的特徴や舞踊の動きに至るまでこうした男性像と女性像の対比が強調されている。

1950年代からワヤンの物語をもとにしてコミックの創作を始めたコサシは、伝統演劇に深い関心を寄せるとともに「スーパーマン」や「フラッシュ・ゴードン」などの米国コミックの影響を強く受けていた。また植民地時代にオランダ式の初等教育を受ける中で西洋絵画の手法や写実的な人物像の描き方にも影響を受けた。彼は多くの作品を残したが、その中には女性の登場人物が活躍する作品もいくつか見られる。コサシは叙事詩を題材とするコミックの中で「伝統的」女性像の魅力を描いただけでなく、自ら行動を起こす勇ましい女性像も描いている。彼の作品は叙事詩のオリジナルに忠実な内容を描いており、全体としては人物像も含めて叙事詩の魅力を伝えることに成功している。ただし詳細を調べてみると、細部には独自の解釈も加えられている。たとえば叙事詩ラー



シーター姫の婿選び競技で勝利するラーマ。[左：舞踊劇 (2007年、インドネシア・ジャワ島)。右：ワヤン・コミック (R.A. Kosasih 1975:44-45)]。





マーヤナは、魔物にさらわれた姫を猿の軍隊の助けを借りて救出するラーマ王子の活躍を描く物語である。その中で囚われの身となるヒロインであるシーター姫の侍女として登場するトリジャタという女性を、コサシは自ら行動を起こす勇ましい女性として改変している。優美で貞淑で従順な女性は、裏を返せば自ら行動を起こせず相手の男性に自分の運命を委ねるしかない女性像である。コサシは叙事詩の中の「伝統」的女性像の魅力を提示しつつ一方でそれを変革することを行った。しかも誰もが知っているヒロインの典型的行動パターンを変えることはせず、それを取り巻く登場人物群に新たな「女らしさ」の可能性を託している。このことは叙事詩の魅力を変えることなく、細部に独自の解釈を取り入れて従来の「女らしさ」を改変していった一つの成果であると言えるだろう。テレビなどの視覚的メディアがまだ一般的ではなかった当時のインドネシアでコサシが描いたコミックは、伝統的な叙事詩を土台としつつも多様な人間像が生き生きと描かれた斬新なメディアの一つであったにちがいない。

### 「男らしさ」をめぐる映画の事例

第2の事例は現代インドネシアにおける「男らしさ」のあり方に問題を投げかけた映画の事例である。32年間にわたって強硬な中央集権的文化政策を実施してきたスハルトが1998年に退陣して以降のインドネシアでは、メディアの出版規制に関する法令が緩和されたこともあり、セクシュアル・マイノリティに関するテーマを含めてジェンダーやセクシュアリティを取り扱う作品が増えている。2000年以降同性愛、ポリガミー、女性の貞操概念を描いた作品などが見られる。

たとえばコメディ映画「マダムX」(2010年制作 監督: ラッキー・クスワンディ)は、ゲイとホモフォビアとの闘争を描いている。

主人公の青年は、インドネシアではパンチ *banci* あるいはワリア *waria* と呼ばれる異性装者である。パンチャやワリアというカテゴリーは外見、職業、日常行動などは規定するが厳密には性的指向(たとえば同性愛者である)までは規定しない。典型的特徴としては女装、女性的しぐさや行動パターン、またサロンの美容師、踊り手や歌手などの職業が知られている(Oetomo 1996: 262)。化粧や料理、裁縫や刺繍が得意であるという特徴も見られる。「男らしさ」に欠けるパンチャやワリアに対して社会的にマイナスイメージを与える傾向は従

来も存在していたが、彼らのライフスタイルや性的指向に対して深刻な批判がなされ、時には彼らに対する暴力などの実力行使も辞さないという現象は、近年のインドネシア社会で顕著に見られる現象である(Boellstorf 2004: 470)。この背景には「強い国家」作りを指向する中で「男らしさ」が重要視されている現状、あるいは世界最多のムスリム人口を擁する社会の中で宗教的規範からの逸脱が問題化されている現状などが見られる。

この映画は終始コメディという手法をとりつつも、現代インドネシア社会における深刻なテーマの一つであるゲイとホモフォビアの闘争をテーマとしたことが特徴的である。

### おわりに

ポピュラーカルチャーの中で描かれるジェンダーやセクシュアリティは、各種のメディア、着衣を通した身体表象、パフォーマンスを通した表現活動、ライフスタイル、日常的言説などを通して、人々の生活規範や思想に影響を与え、時には宗教的規範との関連においても様々な論争を引き起こす。人々はこうした様々な情報やメディア表現を通して、望ましい女性像や男性像のあり方を含む多様なジェンダーの規範を形成していく。

インドネシアにおけるジェンダーに関する事例の考察にとどまらず、こうした文化表現や身体表象をめぐる論争や批評の検討は東南アジア各地の社会が抱える民族、階級、ジェンダー、宗教などの諸側面における価値観の相克や規範のゆらぎをより深く知ることにつながっていくだろう。



Madame X (2010 Kalyana Shira Films) DVD カヴァーイラスト。

### 【参考文献】

- Boellstorf, Tom 2004. The emergence of political homophobia in Indonesia: Masculinity and national belonging. *Ethnos* 69 (4): 465-486.
- Kosasih, R. A. 1975. *Ramayana A,B,C*, Bandung: Erlina.
- Oetomo, Dede 1996. Gender and sexual orientation in Indonesia. In Laurie J. Sears (ed.) *Fantasizing the feminine in Indonesia*, pp. 259-269. Durham: Duke University Press.

### ふくおかまどか

大阪大学大学院人間科学研究科グローバル人間学専攻准教授。インドネシアの舞踊研究を中心に、東南アジアの上演芸術研究に従事。主な著作『ジャワの仮面舞踊』(2002年 勁草書房)、『性を超えるダンサー ディ・ニニ・トウォ』(2014年 めこん 出版予定)